

年間第24主日

マタイ 18・21-35

2020.9.13

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

創世記には、「カインのための復讐が七倍なら、レメクのための復讐は七十七倍」と書かれています（創世記 4・24）。それから七十二人訳というギリシャ語に訳された旧約聖書では、七十七倍かける七というふうになっていて、復讐は際限がないことが書かれています。ところが、イエスは、復讐が際限ないのではなく、「ゆるし」のほうが際限ない、復讐を超えて「ゆるし」のほうが圧倒的に力が強いと言われます。

人は限界のある存在ですから、理論的に感が手も罪を完璧に犯せる人は一人もいません。確かに人は世界の中で、罪によってとんでもないことを起こす可能性を持っていますし、歴史を振り返ればそれがよく分かります。しかしこれらの悪が完璧ではなく、人は罪を犯すにも限界を持っています。しかし、「ゆるし」は人を超える神のほうからやって来るから、いつも人間が犯す罪の限界を超えている。しかもそれは人が望めば人も行うことができると神様は私たちに教えてくださいます。人がおこなう「ゆるし」が、神様のところから来た「ゆるし」であれば、いつも罪を超えていく。「父が完全であるように、あなたたちも完全な者になりなさい」（マタイ 5・48）と言われているから、人は完全な罪を犯すことはできないけれども、神のように完全な「ゆるし」を生きる可能性があるわけです。ですから、神様が私たちの中に働かれるときに、罪を超えた「ゆるし」がこの世界に実現します。

話が変わりますが、屋根から中風の人が降ろされたときに、降ろしてくれた人の信仰を見て、中風の人に、イエスは「あなたの罪は赦された」（ルカ 5・20）と言われます。罪の「ゆるし」を考えると、自分の存在が認められていることが「ゆるし」と非常に関係があるということが分かります。だから、病気をしても、容姿が美しくなくても、取り柄がなくても、弱さをもっている、歳をとっていても、明るくなくても、自分の存在が認められるとき、認められた人の中に大きな変化が生まれます。それが「ゆるし」の特徴です。

ヨハネの福音書の中で、生まれつき目の見えない盲人を見た弟子たちが、「あ

の人が見えないのは本人が罪を犯したからですか。それとも、両親が罪を犯したからですか」という弟子の問いに、イエスは、「両親が罪を犯したからでも、本人が罪を犯したからでもなく、神の業が現れるため」と言われます。ですから、目の見えない盲人が見えるようになったとき、イエスを見る者となる。神の「ゆるし」を見る者となる。神の「ゆるし」を見た人は、自分の存在のすばらしさ、内面にある自分自身の輝きを見ることになります。でも、見えていると思い込んでいた律法学者のほうは、安息日の掟にこだわって、大事なことが見えなくなっていたということが分かってきます（ヨハネ 9・1-16）。

自分の存在が認められるとき、自分の弱さを自分で罰し、自分を滅ぼそうとしていた人は、光に包まれます。しかし自分の弱さを認められない人は、自分は空っぽであるのであることを認められず、奪い取ろうとする者になります。主人から1万タラントン借金していた人は、借金を帳消しにしてもらったにもかかわらず、神様があなたのことを大切にしてくれている、ということをお認めることができなかつた人なのではないでしょうか。神からこれだけ愛されていても満たされず、人からむしり取ることが幸せの条件であると勘違いをしております。

自分が神によってゆるされ、それだけではなく愛されている。だから赦されていた自分の存在っていうのは素晴らしいと分かったとき、人の物を奪って幸せになろうとは思えなくなります。むしろ、自分が幸せすぎるから自分の持っている物をむしろ人に与えたい、という生き方へと変わっていきます。ですから、今日 100 デナリを取り立てた人は、自分自身を赦せない人であることが分かります。神はゆるしているのに、どうしても自分自身をゆるせない。神様は一人ひとり素晴らしいものとしてこの地上に送られたのに、「自分は駄目人間だ」と思い込ませられている人間の姿がある。自分の弱さを認められないのは、個人だけのせいではなく、父のみこころを否定する社会の価値観が影響していますから、父のみこころを生きることによって社会の限界と神に似せて造られた個人の素晴らしさを示す使命を神に呼ばれた者は生きて証ししなければなりません。

人間が人間を否定しても、神様は人間というのは素晴らしいものです。あなたがたとえ 1 万タラントンの借金をしても、そんなことはどうでもいい。それぐらいかけがえのない存在だと教えてくれます。神が私をゆるしたように私自身が自分自身と和解することがない限り、何か人から奪おうとするような生き方を続けてしまうのではないのでしょうか。

人は、どの人も、自分に自信がないので、愛されるために奪ってでも手に入れ

ようと努力するところがあります。そして、自分が持っていないものを人が持っているときに、羨ましく思い、場合によっては妬ましくなり、妬ましい相手が不幸になってほしいと思ったりすることもある。しかし、何もない空っぽの自分が神様や他者から深く愛されていることを知っている人は、持つことに固執しないので、与えることを通して愛することを生きようとしします。

神によって存在を認められていることを今日深めることによって、奪うことで自分を高めるのではなく、人の存在そのものの尊厳のすばらしさ、それから自分自身のすばらしさというものをもう一度味わうことができますよう、それから、わたしたちが持っている弱さからくる劣等感から解かれ、自由な人間となることができますよう、共に祈りましょう。